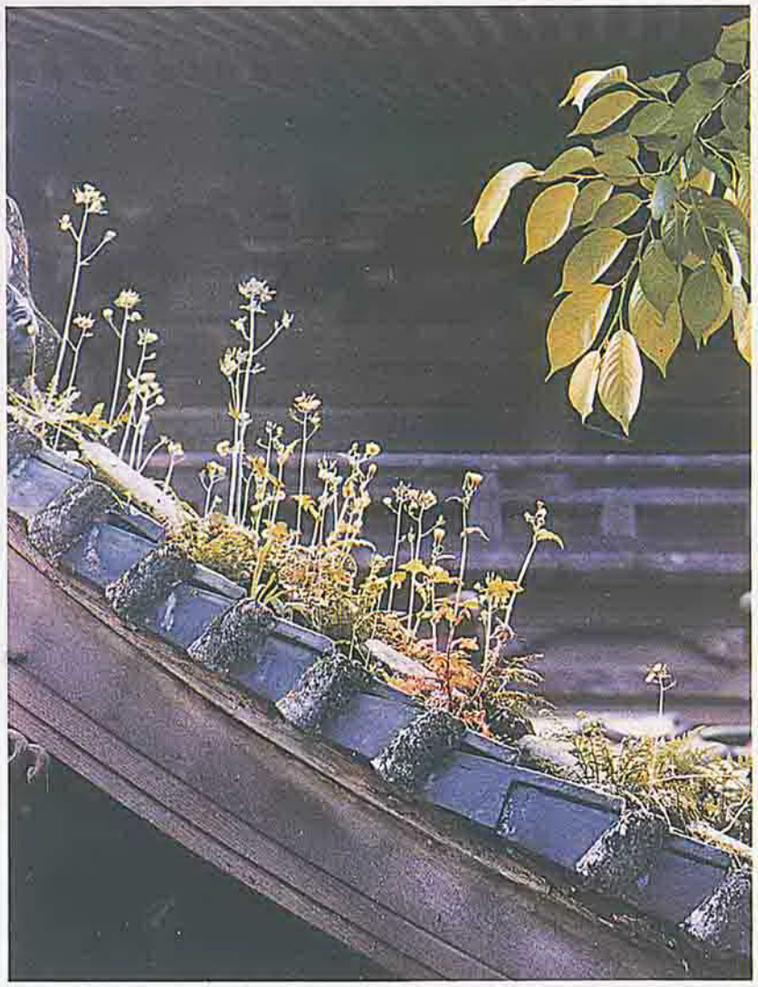
図書館だより

埼玉県立図書館

15号



春の野に菫採みにと来し吾ぞ野をなつかしみ一夜寝にける

万葉集巻八　山部赤人

厳しい冬を越して、春を迎える歓びは、昔も今も変わりない。春の野に菫を摘みにきた私は、野が懐しく、帰りかねて一晩寝てしまったよ――という自然詠詩人・山部赤人は、すみれ咲く野の中に、全身で春を感じとっているかのようだ。

図書館の裏庭も、名も知らぬ雑草の花が、とりどりに咲きはじめた。吹く風も春である。

昭和58年3月10日　編集・埼玉県立図書館広報委員会　発行・埼玉県立浦和図書館　館長　木村繁蔵　浦和市高砂3－1－22　0488－29－2821

雑記「雑木の庭」

中島　愈

「おたくさんは庭が好きなんですね。わたしが関東でこの仕事をはじめて最初のゾッキの庭つくりですよ。」と、若い庭師は目をかがやかせていった。

雑木の庭のことは、一名ゾッキの庭ともいう。関西風の庭である。

「関西ではどんな狭い空間でも、雑木を植えて茶庭風にしたてますよ。関東は一本一本の木を見せる植木場という感じです。関西は全体のふんいきを大切にしますね。それが庭だと思います。」

高校生の時、金閣寺の庭に魅せられて、庭師になるなら「関西で修業しよう」と、関西を志したという庭師は、庭や庭木に関する西と東の違いを話しだす。

中央アルプスを境にして、言語・風俗・習慣など、西と東の違いについて、様々にいわれている昨今である。その中に、木に関するものがあるのはおもしろい。松の木にしても関東では枝をおりまげ、姿・形を整えることをよしとするようだが、関西では、枝・葉を自由に解放することからはじめるという。灯ろうは東の角に対して、まるみあるものを好むという。

私の家は、関西風の庭を選択したわけだ。

庭は約一ヵ月かかって完成し、四季おり〳〵私を楽しませてくれている。春の新緑と花の世界、夏のこもれ陽、秋のもみじ。冬の枯れた枝先と落葉の石畳。私はよく庭を歩く。そして、石畳を踏む自分の下駄の音や深山のおもむきの中に、別の小宇宙を感じたりした。

庭は時々詩の世界も教えてくれる。八木重吉の詩がわかったのも庭を造ってからのことである。

秋／地にひろがる／ひかりを
みていたらば／影もおちてい
た／かげと光は／ころころと
あそぶ

昼日中の太陽の光が、重なりあう雑木の葉かげを地面にうつす。その影のもつれと風のゆれる様が、重吉の詩なのだ。私は、もつれる陽光と影を、重吉のようにじっと見つめる。光と影は、やがて、重吉のかなしみとなって、私の胸におしよせてくる。

ヤマボウシの幹が、病床の子規を教えてくれた。

鶏頭の十四五本もありぬべし

有名な一句の意味がわかったのも株分れして直立する、ヤマボウシの木のおかげである。

「木は立ってばかり見るものではありません。すわっていても寝ていても見る。その視線に耐えられる幹の美しさ。それも雑木の生命ですよ。」

庭師はいっていた。たしかに、その視線をもって、子規も庭を見ていたのだ。鶏頭の十四五本は、ヤマボウシの七八本の幹と、そのうしろにある無数の雑木の重なり合いなのだ。子規は、その空間の生命体をとらえたのであろう。私も時々廊下に寝ころび、ヤマボウシを中心とした庭を見る。

雑木の庭は、時には正真正銘の、茶をのみながら見る庭となる。目によって茶碗をかえて、田舎風のお茶をのむ。

「萩」は、山口に「中原中也」を訪ねた時のみやげ品。両の手ですくいあげるようにのむこの茶碗を、しばらく愛した。茶しぶがはやくしみでるように、四六時中茶をついでいた茶碗でもある。

ふだんは、黒の楽焼きを使っている。この黒楽は、友だちのいとこの作品である。ちょっとしたことから

気があって、もらってきたものだ。肌の厚い、いかにも素人くさい焼きだが、日常的でいい。茶の色がこっくりとみどりに染まる日はとくにうれしい。

備前もいい。雑木の木肌にぴったりしている。自然の土の味と、炎と、松薪の灰で自在に変化した茶碗をみると、あるがままという日本人の自然観さえ感じてくる。胡麻や火襷の肌にふれてのむお茶は、またおいしい。

こうした日々をすごしていると、どうしても唐津や織部がほしくなってくる。「まず織部から」と考えるが、ここで、古田織部という人の実体を知らないことに、ふと気づく。

それからは「織部」を調べることがはじまった。しかし、調べるための参考図書がすくなかった。

・桑田忠親著作集「茶道と茶人」
・古田織部茶書

の二冊は入手できたが、「流祖古田織部正と其茶道」は入手困難。そのために、織部を中に含んだ

秀吉と利休（野上弥生子）・本覚坊遺文（井上靖）・千利休（桑田忠親）（唐木順三）、お吟さま（今東光）

等を読み、織部を知ろうとした。

織部も師利休に似て、悲劇的な茶人であった。その最後は、為政者から反逆者の汚名を着せられての死であった。彼は利休のように、だまって腹を切った。本によると、一言の申しひらきもしない死は、茶人の自由な精神の表われであるという。

だまって死ぬことの自由。そこにはなにがあるのだろうか。この自由な精神が、為政者をおそれさせたのか。そのへんが理解できなくては織部を訪ねる旅にもでられない。

「大胆で思いのままの造型美の中に織部焼きがある」

私はつぶやくと、雑木の庭にでる。

雑木の庭に風がはしった。雨の多かった夏場に、虫にいためつけられたツバキがかわいそうだ。だが、そのいたみにも負けず、青い芽もふきだしている。ワビスケの花がひとつひらいた。ヤマボウシやエゴの木の細い枝先が芽ぐんでいる。

冬に耐える木々のすがたに、私は自然界の自由をみた。

（日本児童文芸家協会　会員）

県内図書館めぐり

＝日高町立図書館＝

昭和五七年四月にスタートした町立図書館は、町のほぼ中央、国鉄高麗川駅より徒歩二分のところに位置している。図書館の開館は多くの住民の願いであった。

現在までの読書普及活動は、公民館図書室、地域文庫、県立移動図書館駐車場を中心に行い、特に地域文庫については地域婦人の手で、それぞれ独自の運営にあたっている。

業務内容は、人や物的面から週一回の貸し出しを余儀なくされているが、土曜日の一日開館には、老若男女、特に午後からは小学生の利用でなかなか盛況である。貸し出し方法は、ブラウン式で登録者の年齢は問わず一人三冊、一四日の期限をさだめている。利用者のリクエストも徐々に増え、その対応は、一部蔵書購入しているものの、ほとんどを県立川越図書館より援助を受けている。前記のように移動図書館は町独自のものでなく、二つの駐車場を設置しているが、地理的な関係など、交通の便を考えるときめの細かい移動図書館活動が適している。

図書購入費については、昭和五七年度六百万円の予算を計上し、基本の図書を中心に年間購入を行ってきた。設立準備期間が短かったため図書の分類、配架などについてもまだまだ考えていく必要がある。

蔵書許容量も限られており、利用者へのサービスもまだまだ不十分である。読書人口の拡大を図り、さらに社会教育施設としての図書館のあり方についても検討を重ね、住民に愛され、利用しやすい図書館づくりをしていかなくてはならない。図書館本来の活動はこれからである。

図書館の概況

○対象人口　四六、五五二人
○蔵書数　七、五〇〇冊
○貸出日　毎週土曜日
○登録者数　一、五八九人
（昭和五八年一月二九日現）

所在地　日高町大字鹿山三四二の二二
TEL　〔四九〕六一五一一四一一

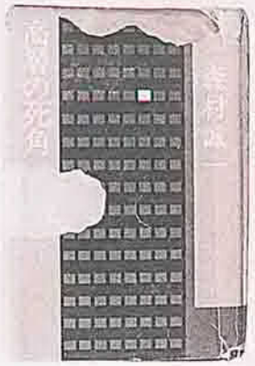
埼玉の文学　郷土の作家と作品

▽4△

今回は、本県出身で他都道府県に在住し、活躍中又は活躍していた作家についてまとめました。

（㊐は文学賞受賞者）

○文芸（小説）
大谷藤子　（東京都）㊐
「釣瓶の音」「再会」
酒井真右　（東京都）
「百舌ばっつけの青春」
沙羅双樹　（東京都）
「明日なき勝者」「天下の糸平」
沢野久雄　（東京都）芥川賞候補
「未知の人」「挽歌」「夜の河」
島村　進　（大阪府）
「沖縄の海は碧い」「阿呆天国」
広池秋子　（東京都）芥川賞候補
「オンリー達」「愛と憎しみの街」
細田源吉　（東京都）
「巷路過程」「罪に立つ」
森村誠一　（神奈川県）㊐
「人間の証明」「高層の死角」
○文芸（ノンフィクション）
伊能　孝　（東京都）
「知られざる日本」「秘湯の旅」
田中美代子　（東京都）
「女ひとり匂いがけ」
○劇作
峯岸義一　（千葉県）
「はじめ地上に道はない」
山下三郎　（東京都）
「浅草の灯は消えず」
○文芸評論
月村敏行　（千葉県）㊐
「中野重治論序説」「江藤淳論」
○作詞、詩歌
岡本　潤　（神奈川県）



「現代詩への招待」
渋谷定輔　（東京都）
「野良に叫ぶ」「大地に刻む」
夢　虹二　（東京都）
「さばくのランプ」
青木山治　（群馬県）
「峠の馬子唄」「旅」
上野友夫　（神奈川県）
「音の世界」
内野和男　（東京都）
「交通安全の歌」
江森国友　（神奈川県）
「詩と自然の内なるもの」
かぜ耕士　（東京都）
「各駅停車の青春に」
関口義明　（東京都）
「あ、上野駅」
堀口定義　（兵庫県）㊐
「弾道」「船と玉葱」
○短歌
石川信夫　（東京都）
「シネマ」「大白光」
松岡貞総　（東京都）
「黒潮」「山彦」「麻薬の愛嬌」
○俳句
清水杏芽　（静岡県）
「現代俳句鑑賞の誤謬」
○児童文学
石井桃子　（東京都）㊐
「ノンちゃん雲に乗る」
片山昌造　（長崎県）
「あかつきの子ら」
鈴木妙子　（東京都）㊐
「ティンクの星」
大石　真　（東京都）㊐
「見えなくなったクロ」
星野ひとし　（東京都）
「空飛ぶ円盤」
○児童文学評論
上　笙一郎　（東京都）

「日本児童出版美術史」（聞書）
これで、郷土作家についての紹介をおわりますが、郷土文学への道標となる本について紹介します。
「埼玉の文学」―その作品と風土―
秋谷　豊著　さきたま出版会
「埼玉文学探訪」
槙　皓志編　朱楼芸文会
「埼玉の文学めぐり」
関田史郎著　富士出版
「新埼玉文学散歩」（上下巻）
榎本　了著　志木まつやま書房
「文学の風土武蔵野」
桜井正信著　社会思想社

（了）

東西南北

16㎜映画フィルム利用案内

県立図書館では、県民の自主的学習に対応し、図書・新聞・雑誌等の貸出閲覧を実施するほかに、視聴覚資料として、16㎜映画フィルムの貸出、利用に供しております。

県立図書館は、四館あり、各館とも視聴覚課が担当し、昭和五七年度当初の映画フィルム所蔵状況は、浦和館一四一七点、熊谷館四六五点、川越館五二八点、久喜館一七五点の点数があります。

これらの映画フィルムを利用するには、次のきまりがあります。

○一団体・五本・五日間（原則）
○予約は電話でできます（市町村教委・公民館・学校に映画フィルム一覧表を配布済）
○利用の二か月前から受付。すべて無料（貸出用映写機あり）
○利用日時　月～金曜9時～17時
　土曜　9時～12時
○休みの日　日曜　祝日　月末日
　年末年始　春秋の特別整理期間
○受領の際　視聴覚資料館外利用証又は16㎜映写機操作認定証の提示

子供向アニメーション・児童劇・生涯学習用の教材映画・科学・文化・記録映画等の広範囲にわたる資料が用意されております。

利用者は、各館に直接申し込むことになりますが、利用日までに期間があるときは、四館相互の連絡車により、最寄りの図書館から受領することもできます。

皆様の積極的な映画フィルム活用をおすすめいたします。

3・4・5月の催し物　主な

■県立浦和図書館

○　映画と講演のつどい
日時　3月19日(土)14時～
演題　「市川房枝先生を語る」
講師　大友よふ氏
映画　「八十七歳の青春―市川房枝生涯を語る」
○　春休み親子映画会
日時　3月29日(火)10時・14時
内容　「プカドン交響楽」、「おば捨て山の月」、「春風の子どもたち」
○　土曜名作映画会
日時　4月9日(土)14時～
内容　「同胞」
○　記録映画を見るつどい
日時　4月21日(木)14時～
内容　「最後の丸木舟」、「東洋のガラパゴス」―琉球列島の動物たち―

■県立熊谷図書館

○　名作映画鑑賞会
日時　4月9日(土)13時30分～
内容　「典子は、今」
○　映画会
日時　4月15日(金)12時15分～
内容　「光の中に翔びたつ日」
○　こども映画会
日時　5月7日(土)13時15分～
内容　「オズの魔法使い」
○　映画会
日時　5月20日(金)12時15分～
内容　「敵の目をくらます昆虫たち」―保護色と擬態―、「東洋のガラパゴス」―琉球列島の動物たち―
○　ビデオコンサート
日時　5月28日(土)13時30分～
内容　「オリビア・ニュートンジョン」全14曲
○　春休み親子映画会
日時　3月29日(火)10時・14時
内容　「ふらいぱんじいさん」、「かさじぞう」、「シンドバッドの冒険」
日時　4月2日(土)10時・14時
内容　「ブルドンズがんばる」、「くまの子ジャッキー」、ほか
○　映画のつどい―さいたまの古代をさぐる―
日時　4月14日(木)14時
内容　「さきたま風土記の丘をたずねて」、「さきわか物語」、「甦える鉄剣」

■県立久喜図書館

○レコード・コンサート
日時　3月25日(金)12時15分～
内容　「NHK大河ドラマテーマ音楽集（花の生涯から草燃ゆるまで）」
○　名画鑑賞室
日時　3月26日(土)10時・13時30分
内容　「口びきのねこ」
○　春休み子ども名画会
日時　3月29日(火)13時30分～
内容　「ジャンバルジャン物語」

◎くわしくは、各図書館視聴覚課へ。

県立浦和図書館　〇四八―二九―二六二一
県立熊谷図書館　〇四八五―二五―二六七
県立川越図書館　〇四九二―四四―五六〇三
県立久喜図書館　〇四八〇―二二―二六九

読書グループの紹介

月輪読書会のあゆみ

宮島チヨジ

滑川村月輪へ移動図書館車が駐車するようになって一年程たった頃「本を借りに来る人たちで集まってみたいね。」こんな声が出てきた。そこで五四年一二月二四日に移動図書館利用者のつどいのビラを配った。

55年一月二九日

移動図書館利用者のつどいを月輪公民館で開いた。悪天候のせいか集まりは極めて悪く六名だった。川越図書館、教育委員会の方とで四名もおいでになって下さった。

図書館の方のお話に、イギリスでは巡回図書館が普及していて家庭には、常時二〇～三〇冊の本が借りてあり、家庭文庫としているそうだ。

話し合い

○利用地域内のＰＲ方法
○図書の貸し出しと返却について
○読書会活動について
○利用の促進について（出席の六人が協力して呼びかける。）
○読書会用図書目録を印刷。

二月四日　利用者のつどい No.2 のビラを配る。

二月八日　利用者のつどい第二回を開く。教育委員会より一名、会員一〇名出席。

話し合い

○気軽に読書会をやってみよう。
○読みたい本を選んでみよう。

「花のれん」「母の面影抄」「田舎教師」の三冊が選ばれる。第一回は「花のれん」に決定。三月中頃配本予定とする。

四月二四日　第一回読書会

「花のれん」配本一七冊　出席六名

船場河島屋呉服店の二代目吉三郎の短いが自由に生きた一生と、それを助け、吉三郎の死後女興業師として成功した、妻たかの苦難の一生の物語で、意見感想を話し合った。

六月五日　第三回読書会「親でなければできない教育」出席一三名

一二月一二日　第四回文学散歩

田舎教師を読む、羽生市役所の宮内芳子先生のご案内で花袋の文学碑等を見学した。

56年二月二七日　第五回読書会「冬の旅」

四月一日　第六回読書会「冬のかたみに」

韓国大邱に生まれ育った作者の生い立ちを知るにつけ、冬の旅の暗いかげが理解できた。

続いて年間の反省　五六年度計画

六月一一日　第七回文学散歩「母の面影抄」

九月一〇日　第八回読書会「花埋み」

日本最初の女医荻野吟子、こんな偉大な女性が身近かな所にいたことを知る。非常な苦しみを頑張りぬいた強い意志に感動した。

一一月二〇日　第九回文学と史蹟の旅「破戒」「千曲川のスケッチ」を読んで、立正大学の丸山和雄先生を講師にお迎えし、小諸を訪ねた。

57年一月二七日　第一〇回読書会「二絃の琴」

この小説は秋沢久寿栄さんという実在の人間国宝をモデルに書かれた。

三月一七日　第一一回観劇会「春琴抄」

四月一日　第一二回あつまり

一年間の反省と五七年度計画

五月二四日　第一三回読書会「しろばんば」

この小説は作者の生い立ちの記として書かれ、主人公の洪作は本人である。ユーモアあり、風物詩あり、上品でほのぼのとしたタッチで描かれてる。

八月一一日　第一四回「鈴木久夫先生を囲むつどい」秋田大学文学部教授鈴木先生を講師にお迎えし、テーマ「明治大正の文学」で藤村を中心としてお話を聞くことができた。

一一月　第一五回読書会

「帰郷」「遠き落日」

58年二月　第一六回観劇会

杉村苑子原作の「滝沢馬琴」を読んで「滝沢家の女たち」を芸術座で観劇することにした。参加者一七名。

五五年三月から読み始めた私たちの読書会は、ささやかな歩みではあるが良いものを読み、共通理解のもとに話し合う楽しさがある。また、年に一度の文学散歩や観劇はことさら楽しみだ。この読書サークルを大切に育てていきたいと思う。

本のひろば

くらしと生活環境

快適な環境での生活は、誰もが望むことです。しかし、今ではいたるところで急速な都市化が進み、そうした環境をまもることは年々難しくなりつつあります。

そこで今回は、『くらしと生活環境』というテーマで私たちの身のまわりを見直してみたいと思います。ここでは、生活環境をまちづくり・緑・住まいという点から考え、それぞれの分野の資料を紹介します。

記載の内容は、以下の順になっています。

書名　著者（編者、記者等）名　出版者（シリーズ名）　出版年（所蔵館名）

まちづくり

アーバンパターン　A・B・ガリオン、S・アイスナー著　日笠端監訳　森村道美、土井幸平訳　日本評論社　一九七五　（熊）

外部空間の設計　芦原義信著　彰国社　一九七五　（久・熊）

街路の意味　竹山実著　鹿島出版会（SD選書121）　一九七七　（熊・久）

現代都市・地域計画　早川文夫・月尾嘉男共編　オーム社（新建築学叢書）　一九八二　（熊・川）

子どものための生活空間　アンネ＝マリー・ボロウィ著　湯川利和・長沢由喜子訳　鹿島出版会　一九七八　（熊・久）

コンパクトシティ　G・B・ダンツィク、T・L・サアティ著　森口繁一監訳　奥平耕造、野口悠紀雄訳　日科技連出版社　一九七四　（熊・久）

地域・環境・計画　水谷穎介著　鹿島出版会（SD選書69）　一九七二　（熊）

東京の原風景　川添登著　日本放送出版協会（NHKブックス335）　一九七九　（浦・熊・川・久）

都市計画と行政プランナー　池上義信著　ぎょうせい　一九八二　（熊）

都市の復権　本間義人著　日本経済評論社　一九八二　（熊）

日本の都市計画法　大塩洋一郎編著　ぎょうせい　一九八一　（熊・久）

比較でみる西ドイツの都市と計画　春日井道彦著　学芸出版社　一九八一　（熊）

人と車の共存道路　天野光三監訳　技報堂出版　一九八二　（熊）

歩行者の空間　ジョン・J・フルーイン著　長島正充訳　鹿島出版会　一九七四　（熊・久）

まちづくりと歩行空間　今野博著　鹿島出版会　一九八二　（熊）

街並みの美学　芦原義信著　岩波書店　一九七九　（浦・川・久）

横浜＝都市計画の実践的手法　田村明監　鹿島出版会　一九八〇　（熊・川）

緑とくらし

環境緑化の手引　東堂行雄著　地球社　一九七三　（熊・川・久）

公園・緑地政策　野呂田芳成編著　産業能率短期大学出版部　一九七五　（熊・川）

花いっぱいの街づくり　全日本花いっぱい連盟編　読売新聞社　一九七四　（熊）

みどり―緑地環境論　只木良也著　共立出版　一九八一　（浦・熊・川）

みどりの挑戦　塩島大著　鹿島出版会　一九八二　（熊）

緑のマスタープラン作成の手引　日本公園緑地協会編　日本公園緑地協会　一九七七　（熊）

緑のまちと市民たち　天覧山付近の自然を守る会編著　三一書房　一九八〇　（熊・川・久）

緑は甦える　梶本保邦著　鹿島出版会　一九七八　（熊）

緑化対策の基礎知識　徳川宗敬監　環境文化研究所編　ぎょうせい　一九七五　（熊）

緑化土木　斉藤一雄編著　森北出版　一九七九　（熊・川）

埼玉県緑の総合対策　埼玉県環境部自然保護課編　一九八〇　（浦・熊・川）

すまいと生活

住居学　吉阪隆正著　相模書房　一九六七　（熊）

住生活と地域社会　日本生活学会編　ドメス出版（生活学論集2）　一九七八　（川）

住宅供給計画論　住田昌二著　勁草

書房　一九八二　（熊）

住宅政策の提言　下山瑛二〔ほか〕編著　ドメス出版（住宅政策研究Ⅰ）　一九七九　（熊）

住宅と生活　国民生活センター編　光生館　一九八二　（熊）

住宅の計画学　改訂版　岡田光正〔ほか〕著　鹿島出版会　一九八二　（熊・川・久）

住宅貧乏物語　早川和男著　岩波書店（岩波新書）　一九七九　（浦・熊・久）

タウンハウスの計画技法　高見沢邦郎〔ほか〕著　彰国社　一九八二　（熊・久）

都市型住宅　大野勝彦著　工業調査会　一九七九　（熊・川・久）

日本のすまい（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）　西山夘三著　勁草書房　一九七五～八〇　（浦・川）

まもりやすい住空間　オスカー・ニューマン著　湯川利和、湯川聰子訳　鹿島出版会　一九七六　（熊・久）

雑誌

季刊環境研究　第41号　〈特集・身近な自然〉　環境調査センター　一九八二・一一　（浦・熊）

埼玉総合研究　創刊号　〈特集・埼玉県・環境問題〉　埼玉県社会経済総合調査会編　一九七三・七　（浦・熊・久）

埼玉総合研究　第9号　〈特集・埼玉の住まいを考える〉　一九八二・一　（熊・川）

自治研究埼玉　第2号　〈特集・埼玉のまちづくり〉　埼玉県県民部自治振興センター　一九八二　（熊・川・久）

ジュリスト増刊総合特集7　現代の住宅問題　有斐閣　一九七七・五　（浦・熊・川・久）

ジュリスト増刊総合特集9　全国まちづくり集覧　一九七七・二一　（浦・熊・川）

◇編集後記

年度最後の15号です。特に「雑木の庭」の名文で頁を飾ることができました。

武蔵野のミニ化にいどみ、見事成功し楽しんでいる様子がありありわかりました。何んとおくゆかしいことでしょう。

「郷土の作家と作品」もいよいよこの号で終りました。更に楽しみ・追及したいむきは、希望やらアイデアをどしどし図書館までおよぜください。

おたずねください

チチブイワザクラ

問　チチブイワザクラは埼玉県固有の植物と聞きましたが、どのような植物ですか。

答　秩父の武甲山の石灰岩の岩地にのみ生えるサクラソウ科の多年草で、他の植物の侵入し得ないような岩壁面に群生し、五月初め頃、先端が五裂した花を開きます。

コイワザクラに似ていますが、ふつう全体がより大型であり、葉柄や花茎に暗赤色の毛がやや密に生えているなど、異なる点が多くあります。また、イワザクラの変種として扱う説（守屋忠之著「武甲山植物誌」）もあるようです。

その形状について「牧野新日本植物図鑑」（保育社刊）では、次のように解説しています。

「葉は卵形で長さ2～4㎝、ごく浅く掌状にさけ、裂片は円味をおび不ぞろいの細かいきょ歯をもつ。葉の表面の脈は凹んでいる。5月上旬に株の中央から高さ7～12㎝の花茎をのばし、紫紅色の美しい花を開く。

この写真は『日本の野性植物(3)』平凡社刊より転載しました

（略）花冠は径2～3.5㎜、筒部は長く、長さ14～18㎜、裂片は倒心臓形で長さ8～15㎜、先は2裂している。」

昭和八（一九三三）年、清水大典・福島定次郎の両氏によって発見され、昭和二五（一九五〇）年中井猛之進・前川文夫両氏により正式に発表されました。

参考資料（本文に挙げたものを除く）「埼玉の花」第一三号　埼玉山草会刊「埼玉郷土事典・自然編」埼玉新聞社刊